

与謝野晶子訳『紫式部日記』について

田村, 隆
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/8974>

出版情報 : 文献探究. 41, pp.33-42, 2003-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

与謝野晶子訳『紫式部日記』について

一

大正五年七月、東京市の金尾文淵堂より、『新訳紫式部日記 新訳和泉式部日記』が上梓された。与謝野晶子の手になる平安女流日記の口語訳である。のち昭和十三年には、以上二作品に『蜻蛉日記』を加え、「現代語訳国文学全集 第九巻 平安女流日記」（非凡閣）として集成がなされる。

晶子による『源氏物語』の訳業については谷崎源氏と並び与謝野源氏などと称される如く、すでに広く知られるところである。角川文庫にも収められているので比較的廉価で求める事もできる。しかし、併せてその日記も晶子の手で訳されている事実については、文学史上で採りあげられる事は稀である。その事情は『和泉式部日記』『蜻蛉日記』でも同じである。今挙げた二つの叢書についても、現在ではともに入手が著しく困難で、一般の目に触れることはほとんどない。唯一、『蜻蛉日記』についてのみ、『与謝野晶子訳蜻蛉日記』（今西祐一郎補注）としてその訳文が「平凡社ライブラリー」の一冊に収められている（一九九六年）。

田村 隆

晶子の『紫式部日記』訳を評して、小室由三『紫式部日記全訳』（広文堂、昭和五年）では、

初めに紫式部と題して伝記を詳述し、次に年譜を掲げ、語釈は無いが本文は全部口訳したもので、日記全訳の魁をなした貴重な参考書である。

と述べ、また一方で宮田和一郎『紫式部日記講義』（日本文学社、昭和十年）には、

名の如く訳本であつて註釈書ではない。又別に取立てていふ程の事も無い。

というそつけない紹介も見えるが、いまだこの訳業に対する詳しい言及はない。

そもそも晶子自身、『紫式部日記』について、文学作品としてはさして高い評価を与えていないようである。「紫式部考」（金尾文淵堂版口語訳の解説。大正五年）や「紫式部新考」（有精堂『源氏物語Ⅰ』）「日本文学研究資料叢書」所収。初出『太陽』昭和三年一・二月）として伝記を発表しているが、それらの資料としてしばしば『紫式部日記』を用いている。

紫式部日記に書かれて居る兄の式部丞は…。

紫式部日記に…の記事のあるので想像される。

紫式部みづから日記に述べて居る。

の如くである。が、それは裏返せば、主に伝記としてしか利用価値を認めていないということでもある。『紫式部日記』に対する、

「源氏物語」に比すれば天才の一鱗に過ぎない。

併し紫式部の偉大な実力を知らうとするには「源氏物語」を通読する外は無い。

という批評を目にするとき、やはりこの日記を二次的な作品としか考えていなかったように思えるのである。『源氏物語』理解に際し、伝記資料としての精読の要があったということなのであろう。池田亀鑑『紫式部日記』（至文堂、昭和四十二年）の序文を草した久松潜一氏は「紫式部日記は、古くは源氏物語の作者紫式部を知るためにとりあげられており、また故実を知る書としても重んじられたが、文学作品として認められるに至ったのは、明治の末から大正時代になってからではないかと思う」と述べる。たしかに、同時代の「これによつて、式部の性格も、思想も、挙動も、大体知ることが出来るのである」（『校註日本文学大系』解題）の類のコメントは随所に散見される。晶子はまさにそのような時代に生きたのであつた。この日記が一方で持つ自照的な側面等は、晶子の手で特に論じられることはなかった。

日記としてはむしろ彼女は『和泉式部日記』の方を評価していた節がある。その訳の自序で「三人称で客観的に描写した短篇小説です」、「殊に和泉式部日記が遠く明治の小説に先だつて、自己の経験を書く小説の最初の作」と認め、訳中、式部のことを一貫して「和泉」と呼んでいる。現在では、平安朝の私小説といえは『蜻蛉日記』を思い浮

かべる向きが多いが、晶子にとつてそれは『和泉式部日記』であつたらしい。『和泉式部日記』の訳業については、松浦あゆみ「晶子の和泉式部―『新訳和泉式部日記』の恋―」（『与謝野晶子を学ぶ人のために』世界思想社、一九九五年）に論考がある。

二

訳出にあつたつて、晶子が用いたテキストは何であつたらう。『蜻蛉日記』については自身、「日本古典全集」の本文を用いたと明言しており（『現代語訳国文学全集』）、またそのことはすでに指摘されてもいる。^{（注1）}だが、そのような断り書きは、『紫式部日記』に関するかぎり、ない（『和泉式部日記』、『栄花物語』についても同様である）。

そのうち、『栄花物語』については松村博司『栄花物語の研究』が、この訳本の拠つた本文は何であらうか。明暦二年の板本の外には、この頃までに入手し易い活版本としては、日本文学全書本しかないが、対照して調べてみると、栄華物語詳解の本文に拠つてゐるらしいのである。

と指摘しており、「所々に詳解の説になづまず晶子独自の見解の見られる所もあるのである」と付け加えている。また、『和泉式部日記』については、前掲松浦氏が群書類従本を「訳への使用の明記はされてないものの、作中歌等の一致から晶子の口語訳の土台と目される」と推測している。これらを参考に、『紫式部日記』の場合を考えねばならない。

『紫式部日記』をめぐる本文研究の状況には時間的に近接した二つ

の転機がある。その一つは池田亀鑑『紫式部日記』所収の「校異紫式部日記」によって、諸本の様子が一望できるようになったこと。これは先に記したように昭和四十二年に刊行された。もう一つは昭和三十六年、そして四十二年と相次いで報告された松平文庫本・黒川本の出現である。だが、無論晶子が生きた時代はそれらよりはるかに遡る。訳業がなされた頃までの『紫式部日記』のテキストを年次順に一覧してみよう。叢書の一冊に収められているものは、叢書名のみを掲げる。

- ・扶桑拾葉集（巻四） 元禄二年刊
- ・紫式部日記傍註 壺井義知 享保十四年刊（昭和五年、「国文学註釈叢書」所収）
- ・群書類従（巻三百二十一 日記部） 文政二年刊（明治二十七年八月、経済雑誌社より翻刻を刊行）
- ・紫式部日記解 足立稲直 文政二年成立（明治四十二年、「国文学註釈全書」所収）
- ・紫式部日記釈 清水宣昭 天保四年刊（昭和五年、「国文学註釈叢書」所収）
- ・紫式部日記解 田中大秀 天保六年成立（昭和十三年、「未刊国文学註釈大系」所収）
- ・日本文学全書（野口武次郎編） 博文館 明治二十三年
- ・校正首書紫式部日記 鈴木弘恭 明治二十七年
- ・紫式部日記講義 長田政孝 明治二十八年
- ・評釈紫女手簡 木村架空 明治三十二年（いわゆる「消息文」の部分のみ）
- ・紫式部日記講義 三木五百枝 明治三十四年

・国文大観（丸岡桂・松下大三郎共編） 明文社 明治四十二年
・校註国文叢書（池邊義象編） 博文館 大正二年
・平安朝日記集 有朋堂文庫 大正五年六月十八日
ここで、与謝野晶子『新訳紫式部日記』（大正五年七月二十三日）が刊行される。ただし、最後に挙げた「有朋堂文庫」版が出てから晶子の訳が成るまでにはわずかに一月余りしかなく、実際にはこのテキストを利用する事はかなわなかったはずである。「校註国文叢書」本までが参照の候補となる。

ちなみに、その後昭和十三年に「現代語訳国文学全集」版が刊行されるまでの状況も追っておこう。

- ・紫式部日記精解 関根正直 明治書院 大正十三年
 - ・校注日本文学大系 国民図書 大正十四年
 - ・日本古典全集（正宗敦夫編） 昭和三年
 - ・紫式部日記評釈 永野忠一 健文社 昭和四年
 - ・紫式部日記全釈 小室由三 広文堂 昭和五年
 - ・岩波文庫（旧版） 池田亀鑑 昭和五年
 - ・紫式部日記新釈 岡田稔 昭和八年
 - ・紫式部日記講義 宮田和一郎 日本文学社 昭和十年
- 『蜻蛉日記』の口語訳に用いたという「日本古典全集」版は、右の如く昭和三年に世に出されており、それは『紫式部日記』の訳出よりもずっと後のことになる。その頃には、天和本を底本とする旧版の岩波文庫も刊行される（池田亀鑑校注）。しかし、「現代語訳国文学全集」版でも晶子は特に旧稿に手を加えていないことから（ルビが除かれているのみ）、今挙げた八種の書物は訳に対する直接的な影響はない。手がかりとなるのは、日記中の脱文の問題である。すでに池田亀鑑

『紫式部日記』などに詳しく説かれたことではあるが、『紫式部日記』邦高親王自筆本系統の諸本には途中八箇所の脱文があつて、流布本(正確には黒川本・松平文庫本を含む)ではそれらが全て補われているというのだ。晶子の訳はその脱文箇所の文言を八箇所すべて備えており、脱文の補填を経た流布本系統のテキストに基づいていることがここで確認できる。

とすれば、晶子が用いたのは『和泉式部日記』の場合と同じく群書類従本ではないかという可能性がまず考えられよう。しかし、実際にはどうもそうは思われぬ。本文に異同がある箇所について訳文と照らし合わせると、不一致が多く見られるためである。先に並べた諸書の中ではむしろ『紫式部日記』の本文に近い。

参考までに、本文に異同がある箇所の、『紫式部日記』・群書類従本の本文と晶子の訳をいくつか併せて掲げておく。

紫式部日記	群書類従	晶子訳
・ 菊の露わくる	菊の露わかゆ	菊の露わくる
・ 加持まいる。	加持まゐり、	お加持をした。
・ いとくほしくみゆ	いとくをかしくみゆ	可笑しかつた
・ 十六にあまればわる	十六にあまればいる	十六の甕に汲み分けた
・ やりとよりに	やりどより北に	戸口の外に

顕著な異同が少なく、又それさえも完全な符合でないので猶即断はしかねるが、私見では晶子が訳出の底本に用いたテキストは、この『紫式部日記』であったと推測される。この本文は後に「有朋堂文庫」、「日本古典全集」の底本にも採用されており、当時の『紫式部日記』本文として最も大きな影響力を持っていたと考えてよい。「日本古典

全集」の解題にも、

藤井高尙の門人で名古屋の人清水宣昭が著した紫式部日記四巻は諸本を参考して校訂した本で一般に善書(引用者注・善書の誤りである)とせられてゐる。別によい本も発見せられなかつたから総て此書に拠り、近く関根正直博士が著はされた「精解」を参考した。

とあるから、当時のテキスト選択の基準は大筋においてそのようであつたのだろう。その状況は先に掲げた岩波文庫版で「なほ刊本としては、壺井義知の紫式部日記傍註があり、清水宣昭の紫式部日記釈がある。いづれも邦高親王本より古い本の系統のものではないのみならず、かなり本文が乱れてゐる」(解説)という立場のもとに『釈』の本文が斥けられるまで続くのである。

ただし、必ずしも無批判に『釈』に拠っているわけではない。それを示す一例を見よう。『紫式部日記』には先の八箇所のほか、さらに注目される脱文がある。それは日記も終りに近い寛弘七年正月の記事である。日記本文は以下、『紫式部日記』を用いる。

うへに、四条ノ大納言、はうしとり、頭ノ弁、びは・ことは、経孝ノ朝臣、左宰相中将、さうのふえとぞ。

池田氏は傍線部を「群書類従本系統にしかない」と述べる。たしかに、多く黒川本を底本とする現行の諸注釈を見ても、傍線部を空欄のままにするものが多い。

先に挙げた同時代の注釈書は、そのほとんどは意味の通ずることを重んじ、群書類従本系統の本文を採用する。例えば、明治二十七年に刊行された『校正首書紫式部日記』(鈴木弘恭)の本文にも、

四条大納言、はうしとり、頭ノ弁、ひわ。ことは、経孝朝臣。左

の宰相中將。さうのふえとぞ。

と見え、頭注に「此の四字並本にはなし類本積本にはありある方よし」とある。本書の添言にも、

今おのれか校正に用ゐたる書は。類本（群書類従本のこと也）扶本（扶桑拾葉集本のことなり）鈔本（黒川氏藏敷原彦磨自筆本の写の古鈔本のこと也）積本（清水宣昭か積のこと也）傍本（壺井義知か傍注のこと也）等をむねとしたれと。また栄花物語初花卷をも参考に加へつ。

と類従本は最初に記されており、強い配慮がうかがえる。

さて、ここを晶子はどう訳したか。

殿上では公任大納言がその役を勤めて、頭の弁の琵琶、参議左中將の琴その他の合奏があつた。

すなわち、「経孝朝臣」の名は見えない。これは彼女が『釈』の注記、「類本によりてくはへつ」を重く見、純粹な本文―無論、晶子とその時代にとって、ということであるが―の維持という意識から、この人物の名をとばして訳したのではないかと思われる。とばすことで浮き上がった琴の奏者を、次に見える「左宰相中將」とし、笛の吹き手の不在は「その他の合奏」として処理してしまっている。この処理については、その少し前にも同じく「類本によりてくはへつ」と注記ある「中宮大夫」の名を、やはり削除して訳しており、晶子のテキストに対する柔軟な姿勢がかいま見られるのである。

またその考察の過程で、当時唯一、晶子の訳に符合する本文を持った『紫式部日記傍注』を参照した可能性もある。その本文は、

ことは左の宰相。中將さうのふえとぞ。…いせの海。右のおと、わこん。

とあつて、「経孝朝臣」の名は見えない。他の箇所での不一致が多すぎるため、底本にしたとは認め難い本であるが、参照用の一本としてこの『傍注』を挙げることはできよう。

三

ここで、具体的に訳文を細かに検討してみよう。以下の引用は初出の金尾文淵堂版による。「全集」版の凡例に、『紫式部日記』、『和泉式部日記』は旧訳をそのまま用いていることを記すとおり、この二種類のテキストは、本文の字句は全て一致するが、金尾文淵堂版には総ルビが付されていたのが「全集」版では落とされて異なる点が異なっている。後にも触れるが、「母様」等に見られるように、近世以来の小説類の如くルビの効用もあるので初版の方が読んでいて面白い。本稿ではルビはそのままにしたが、旧字については適宜、現行の字体に改めた。

訳が分かれる箇所を検討する。有名な冒頭の場面。原文、訳文の順に掲げる。

秋のけはひのたつまゝに、土御門殿のありさま、いはんかたなくをかし。池のわたりのこずゑども、やり水のほとりの草むら、おのがじゝいろづきわたりつゝ、おほかたの空もえんなるにもてはやされて、ふだんの御どきやうの声々、あはれまさりけり。やうく、すゞしき風のけしきにも、れいの、たえせぬ水のおとなひ、よもすがら、きゝまがはさる。

夏から初秋に移つたこの世界に最も趣の多い所があつた。

それは土御門殿である。池を中心として立ち繞つて居る大木の梢にも、小流を挟んだ草原にも、いろいろの紅葉が出来て、上にはすべての色を引き立てるやうな美しい空があり、下には不断、経の音が響き、白金のやうな快い風に涼しい水の音が夜通し混つて聞えた。

適度に説明を加えたり文を縮めたりしているので、全体としてはほぼ同じ分量に仕上がっている。この箇所を秋山虔「晶子古典現代語訳私見」は、

紫式部日記の冒頭は、土御門第の初秋の優艶な風情を享受しつつ中宮彰子の許に仕える身の至福の思いを語りつづけるが、じつはその思いが却てその思いを合点しえない別の思いを喚起している、この重くえもいわれぬ呼吸が私の胸にこたえるのだが、『新訳紫式部日記』の文体は原作とは別にいかにもさわやかに軽快である。

と批評している。日記から窺える「この重くえもいわれぬ呼吸」こそ、『和泉式部日記』などには見られないものであり、また逆にそれが晶子がこの日記をさほど好まなかった理由であるようにも思える。

また、「下には不断、経の音が響き、白金のやうな快い風に涼しい水の音が夜通し混つて聞えた」の一文について、この原文は、
ふだんの御どきやうの声々、あはれまさりけり。やうく、すゞしき風のけしきにも、れいの、たえせぬ水のおとなひ、よもすがら、きまがはさる。

であるが、「混つて聞えた」のは何と何の音か、従来説が分かれてきた。彼の五月よりの不断の御読経の声に池水の音の響合て聞混ふと

なり。

〔紫式部日記解〕

やうくすずしと思ふばかりふく風は、音もおのづから耳にたつべくなりぬれば、夜もすがら、いつもききなれたるやり水の音に、きまがはさるとなり。

〔紫式部日記釈〕

これらに代表される二説である。現在では前者に解する注釈書も多いが、晶子の訳は「白金のやうな快い風に涼しい水の音が夜通し混つて聞えた」であるから、「聞きまがはさる」のは風と水の音ということになる。後者『紫式部日記釈』の説である。これは前節で提案したテキストの問題にも合致する。

四

ところで、晶子は『源氏物語』のほかに、もう一篇、長編物語を訳している。それは『栄花物語』である。なにゆえ『枕草子』などでなく『栄花物語』なのか、という疑問も抱きたくなるが、その理由は晶子自身の説明によれば、「猶、源氏物語を読むには、その背景となつた平安朝の宮廷及び貴人の生活を知ることが必要である。それで自分はこの書に次いで、当時の歴史を題材とした写真小説である栄華物語の新訳に筆を著して居る」（前掲「新訳源氏物語の後に」ということであるから、これも『紫式部日記』に対する関心と相似たものがあつたようである。また、明治四十年五月一日号の『明星』にも「源氏、栄華、大鏡と云へば、平安朝文学の花なり」と見える。

さて、文学史の事実として周知の如く、『栄花物語』巻八「はつはな」は、そのかなりの部分を『紫式部日記』に負っている。ほとんど

同文とおほしい箇所すらある。この両作品をともに一人が訳出することは、現行の諸注釈書を眺めても類がないように思われるが、晶子は現実にならざるに配慮したか、考察を加えたい。

この問題については前掲松村博司氏の論考に、「此處には「栄華」の作者が紫式部の日記の文章を借りてゐるので、観察も精緻、文章も巧妙一段の生彩を加へてゐる」といふ晶子の言が紹介されている（誕生日『光る雲』所収、大正十四年十二月）。『紫式部日記』と『栄花物語』の二書の関係について十分意識していたことが見て取れる。

晶子の『新訳栄華物語』については、その出来映えは大変評判が良い。松村氏は「即ち現代語訳乃至は口語訳とはいつても逐語訳ではなく、多分に創作的で、総ルビを施し、センテンスの短いきびきびした平易な文体で書かれてゐて、明快であり、恐らく何人も興味を持つて読むことができるであらう」と記している。また、尾崎左永子「晶子と古典」も、『新訳源氏物語』よりもむしろ出来がいいというか、筆にのびがある」と述べる。たしかに、この訳には例えは道長の言を「隆家君は無邪気ない人物なんだが、兄さんのために、禍されて居るのだ」、「母様もまた幸者だ、いい良人を持つたものだ」（はつはな）と訳すなど、読みやすさを求めて雰囲気の訳出にも努めている節があり、他にも晶子の工夫が随所に散見される。松村氏はさらに、「大正五年七月に刊行された『新訳紫式部日記』、『新訳和泉式部日記』も同じやうな行き方をしてゐる」とも述べるが、前節でも引いた日記冒頭を題材に、二作品の文章を比べて確認してみよう。

秋のけしきにいり立つまゝに、土御門殿の有様いはん方なくいと
おかし。池の辺りの梢・遣水のほとりの草むら各色づき渡り、大

方の空のけしきのおかしきに、不断の御読経の声くあはれ勝り、
やうく涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水の音なひ、夜もす
がらきくはさる。

初秋の土御門殿は趣に富んで居た。池の辺りの大木の梢や小流
の傍の草むらが日に日に色附いて行く。上には瑠璃のやうな空が
あり、下には不断経の音が響き、白銀のやうな快い風に、冷
かな水の音が夜通し混つて聞えた。

以上が『栄花物語』の一節である。これを『紫式部日記』と比べて
みよう。次に再掲する。

夏から初秋に移つたこの世界に最も趣の多い所があつた。そ
れは土御門殿である。池を中心として立ち繞つて居る大木の梢
にも、小流を挟んだ草原にも、いろいろの紅葉が出来て、上には
すべての色を引き立てるやうな美しく空があり、下には不断経
の音が響き、白金のやうな快い風に涼しい水の音が夜通し混つ
て聞えた。

本文の違いもあるので単純な比較は出来ないが、それにしても重
なる表現が多いことに気づかされる。特に傍線を施した部分は完全な一
致を見、『栄花物語』の自らの訳文が、『紫式部日記』の折に十分生か
されていることが見て取れる。ただ、部分的には「白銀」を「白金」
に、「小流の傍の草むら」を「小流を挟んだ草原」に、「冷かな」を
「涼しい」に改めるなどの工夫も見える。また、全体の分量も五十六
文字ほど増えている。『新訳栄華物語』の刊行は大正三年で『新訳紫
式部日記』に二年先行することから、『紫式部日記』を訳すにあたつ
て新たに若干の推敲がなされたということであろう。座右には『新訳
栄華物語』という、格好の材料があつた。

省筆というレトリックがある。「よろこび聞こえたまふさま、書きつづけむもうるさし」(『源氏物語』須磨)の如く、文章を途中で略す時に用いる叙法である。だが、大変興味深いことに、晶子はこの省筆をそのまま訳そうとはしない。『紫式部日記』の省筆は管見では十一例を数えるが、その訳出に工夫が見られるのである。これは近代小説にはあまり省筆が好まれないことと関係しようか。

そのことは見ず。

これは人から聞いたことを書いて置くのである。(九月十一日) 少し言葉を加えて訳していることに気づくであろう。これは一般に省筆というものが、「見ず」「聞かず」など、単調な印象を与えがちなため―それゆえに近代小説では用いたがらないのである―、それを避けるための処理と思われる。

あるまじきことにさへ、おもひかゝりて、ゆゝしくおぼゆれば、めとまることも、れいのなかりけり。

深刻な悲しみが自分を窺つて居るのを知ると、目に見て、居るものの何物にも興味が持てなくなるのである。(十一月廿二日) 「悲しみ」の色合いが強く映し出され、「例のなかりけり」、すなわちいつものように興味を引かなかつた、という原文のニュアンスとはやや異なつて訳されている。

みづから、え見侍らぬことなれば、えしらずかし。
併し時と場合に合せて、ああもしなければならぬ事と、かうもしなければならぬことがあるから、むづかしいのである。(消息文)
この場合も、訳出の段階で「え知らずかし」とはつきり述べる事は

避けている。

はしらがぐれて、まほにも見えず。
自分の席からは柱が邪魔になつてこの人だけがよく見えなかつた。(十月十六日)

にしによりて、おほ宮のおものれいの、ぢんのをしきなにくれの
だいなりけんかし。そなたのことは見ず。

沈の敷膳、銀の高膳などは例のやうであつたのであらうが、遠く
てよく拝見することが出来なかつた。(十一月一日)

それぞれ「この人だけが」「遠くて」など、少しづつ言葉を足している。そこには、なるべく「見ず」「聞かず」の理由付けをなしておこうとする晶子の意図がかいま見られる。これは、省筆をそのまま訳したときに受けがちな、無関心・無感動の印象を注意深く避けようとしていると考えられないだろうか。

また、意訳の幅が特に大きいものに、次の例がある。敦成親王の七日夜の産養の記事である。

かけまくもいとさらなれば、えぞかきつゞけ侍らぬ。
晶子の訳はかくである。

美しくい人を写すために中宮様をお引き合にお出しすることは
申し訳のないことであるから、もう書きません。(九月十七日)
本文としては「こんなことを口にするのもいまさらめいているので」(新大系)として叙述の煩雑を避けようという意であつて、「中宮様をお引き合に」云々という句は行き過ぎにも思えるが、これはおそらく『釈』に見える「【かけまくも】は、言にかけて申さんも恐れおほくといふ意」の注に拠つたのであらう。また実際、その解の方が、もつともらしい弁明の辞を求める晶子の意にかなうものであつたに違ひ

ない。

このように、晶子は『紫式部日記』に見える省筆に対し、その理由を補ったり、あるいは意識的にニュアンスを異にして訳している。そして、これはすでに『源氏物語』を訳した折にも配慮された事柄であった。物語における省筆をいくつか見てみよう。

惟光、いさゝかのこと御心に違はじと思ふに、おのれも、偶なきすき心にて、いみじくたばかりまどひ歩きつつ、しひておはしまさせそめてけり。このほどの事くだぐしければ、例のもらしつ。

源氏の機嫌を取ろうと一所懸命の惟光であったし、彼自身も好色者で他の恋愛にさえも興味を持つほうであったから、いろいろと苦心をした末に源氏を隣の女の所へ通わせるようにした。

夕顔巻、『源氏物語』における最初の省筆である。ここで注目すべきは、訳文では傍線を施した一文が削除されている点である。「くだぐしければ」というのは語り手の主観的な意志を示すが、それが注意深く取り除かれているのである。『源氏物語』にかぎらず平安朝の古典においては「くだぐだし」「うるさし」という姿勢がポーズとしてしばしば表明されるが、『紫式部日記』の折と同じく、晶子はこの修辞を受け入れなかったようである。

これは決して一例のみの偶然ではない。同じ夕顔巻から。

何の響きとも聞き入れ給はず、いとあやしうめざましき音なひとのみ聞きたまふ。くだぐしきことのみ多かり。

けれどもこの貴公子も何から起こる音とは知らないのである。大きなたまらぬ音響のする何かだと思っていた。そのほかにもまだ多くの騒がしい雑音が聞こえた。

ここには「くだぐしき」の意味を叙述すべき事柄の煩雑さでなく「雑音」と解した点で、やや誤解があるようである。あるいは故意であろうか。

こまかなる事どもあれど、うるさければ書かず。
細々しい手紙の内容は省略する。

かやうのくだぐしきことは、あながちに隠ろへ忍びたまひしものとほしくて、みなもらし止めたるを、

こうした空蟬とか夕顔とかいうようなはなやかでない女と源氏の話は、源氏自身が非常に隠していたことがあるからと思つて、最初は書かなかつたのであるが、

この二例でも「うるさければ」「くだぐしき」にあたる部分の訳語がない。

この傾向は他の巻にもあてはまる。また少し例を掲げれば、この御中ものいどみこそあやしかりしか。されどうるさくてなむ。

つまらぬ事までも二人は競争して人の話題になることも多いのである。
ある。(紅葉賀)

やはり、「うるさくて」云々が完全に削除されてしまっている。他にも、

あはれなる御遺言ども多かりけれど、女のまねぶべきことにしあらねば、この片はしだにかたはらいたし。

前の帝、今の君主の御父として御希望を述べられた御遺言も多かったが、女である筆者は気がひけて書き写すことができない。

よろこび聞こえたまふさま、書きつづけむもうるさし。
(賢木)

こんなことを言つて喜んだ女御のことなどは少し省略して置く。

(須磨)

心々にあまたあめれど、うるさくてなむ。

(松風)

なおいろいろな人の作もあつたが省略する。
の如く、「うるさければ」の類は可能なかぎり注意深く除かれているのである。

この物語に心酔した晶子は訳者という自らの立場を半ば忘れ、ほとんど物語の語り手に見立てていたことであろう。そんな彼女からすれば、記述の行為を「うるさし」「くだくだし」と書きとめることは、華やかな平安朝文学の描写態度としてふさわしくないと考えたのであるまいか。そこに覚える違和感が耐えがたかつたのである。それは『源氏物語』に限らず、『紫式部日記』やその他の古典に対しても同じであつた。「徒らに煩瑣を厭はしめるやうな細個條を省略し」、「必ずしも原著者の表現法を襲はず」、「新訳源氏物語の後に」大正二年」と表明する晶子の姿勢は、省筆という修辭法に向かつても確かに發揮されていた。

注

(1) 前掲、平凡社ライブラリー版解説。

(2) 具体的に挙げれば、

一、すはま鶴をたてたるしさまめつらし(新大系二六八頁)

二、左近命婦筑前の命婦近江の命婦(同二七〇頁)

三、七日夜はおほやけの御つふやしなひ(同二七〇頁)

四、弁の内侍はしるしの御はこ紅(同二七五頁)

五、さへもて参り給へればとらせ給へるを(同二八五頁)

六、御使御とのより左京の(同二九四頁)

七、かしつくと聞えしか絵にかいたる顔して(同三〇二頁)

八、みなものし給ふ下らうのいてあぶを(同三〇八頁)

の八箇所である(池田龜鑑『紫式部日記』による)。

(3) 池田龜鑑氏も『傍註』について、「世に流布印本というのが即ちこれである」としてその流布を認め、また事実、このテキストは明治に入つてからも刷られており、晶子の目に触れた可能性はかなり高いと思われる。先に紹介した『校正首書紫式部日記』を上梓した書肆、雁金屋青山堂からも『傍註』は出版されており、その広告には、「且此旁注は有識家なる壺井義智のものせし所なれば礼儀故実服装などつばらに注釈せられたりさればたゞ文章のみにはあらで古学ひする人の為にはこよなき宝典とも云べし」と見える。

(4) 前掲『与謝野晶子を学ぶ人のために』。

(5) 『源氏物語』の口語訳については、市川千尋『与謝野晶子と源氏物語』(国研出版、一九九八年)などに詳しい。

(6) 『全訳源氏物語』(角川文庫、昭和四十六年)による。

(7) 『源氏物語』の省筆については、近く別稿にまとめる予定である。

(たむら たかし・九州大学大学院修士課程)